



加賀美レイナの後処理調教  
「深夜の訪問者」

02

## 【プロローグ】

「社長、ちゃ〜んと体を綺麗に洗えましたかあ？」

浴室から出てきた男に、女は優しく語りかける。裸で腰にタオルだけ巻いた男に対し、女は都会のオフィスで働いてそうなフォーマルなスーツを着こなしていた。靴もはいたままだ。

女の細い指が男のタオルの結び目に触れると、男はあからさまな抵抗こそしないものの、腰をクネらせて必死に拒否する仕草を始めた。

半裸の状態とは言え、男の方が力が強いことは明らかだ。体の自由を奪われている訳でもない。

抵抗しようと思えばできるはずなのにそれをしない。

二人の間には、物理的な事象を超えた「何か」が存在しているようだ。

男はそれに苦しみ、女は楽しんでいるようにも見える。

「ふふ、何を恥ずかしがってるんですかぁ？　ここではこんなもの、必要ないでしょう？　そもそも、誰がタオルを巻いて隠していいなんていったのかしら…」

女がタオルを剥ぎ取ると、男の股間があらわになる。初老に差ししかかった男のペニスは、プックリと膨れたお腹の下におまけのようにくっついていた。

鉄製の貞操帯で覆われているが、その中で暴れる気配もない。

「あらあらぁ、何だか元気がないですねえ。数日間の禁欲生活でやる気を出して貰おうと思ったのに、すっかり大人しくなっちゃって。やっぱり、老いぼれチンポにはお薬が必要ですね♪」

女の言葉に男のペニスがピクンと反応する。

それは歓喜の反応なのか、あるいは恐怖の反応なのかは分からない。

「お薬は錠剤の方がいいかな？それとも、注射にしておきましょうか…。」

女は質問とも独り言とも取れる言い方でボソボソと呟きながら、男がつけている貞操帯の鍵を外し、バスルームの外へと誘導した。

洗面所の敷居をまたぐと、部屋の様子は一変する。

床はコンクリートむき出しの作りになっており、照明は薄暗く部屋全体を照らすには至っていない。

壁には複数の鞭や拘束具が掛けられており、中央付近には拘束具と思われる鎖がブラ下がっている。

「あら、もしかして気付きました？ そう、部屋を少しアップグレードしたんです。

もっと効率的に、カッコ良く拘束できるようにね。

今日は早速、それを試して見ようと思って…。さあ、こっちに来て下さい？」

女は男の手を取り、ぶら下がっている鎖の元へと誘導する。  
そして…

## 【1】

一千葉県に入りましたー

カーナビの音声が聞こえてくると、四<sup>の</sup>之<sup>み</sup>宮<sup>や</sup>綾香は腕時計に目をやった。

時計の針は 20 時 58 指している。約束の時間は 23 時。

急に入った依頼のため、多少の遅れは問題ない旨が、依頼書に記載されていた。

オーナーである眞代から送られてきたものだ。

そうは言っても、やはり時間に送れるのはよろしくない、と綾香は思う。

気持ちよく仕事に入る事ができず、結果として集中力を欠いた状態になり、写真の出来が悪くなってしまうのだ。

「ギリギリで間に合うって感じかな。まあけど、この時間帯なら大丈夫か」

そんな事を考えながら、綾香はベンツのアクセルをグッと踏み込んだ。

世の中で、他人の性的な行為を写真に収める仕事と言われても、ピンとくる人は少ないだろう。

しかし、その需要は確実に存在する。

嗜好の違いはあるものの、自分の、あるいは自分達の性的な行為を記録に残しておきたいという人間は少なくないのだ。

世間の認知度が低いのは、それが限られたコミュニティの中でのみ存在しているからなのだろう。

「秘密厳守」が徹底される業界であることも影響しているのだろう。

そして、「秘密厳守」という鉄の掟さえ守っていれば、案外トラブルが起きにくい仕事でもある。

しかし、今回の依頼は、いつもと様子が違うようだ。

クライアントは綾香の雇い主である真代の顔馴染みであり、この業界に精通しているらしい。

そんな事情もあって、急な依頼にも関わらず、今回は対応するのが難しくなかった訳だが…。

「それにしても、何だってこんな所に…。高速を使うにしても不便だし。

しかも、パンストにハイヒール着用ってどんな依頼なのよお。」

千葉北インターチェンジで高速を降りてからも、目的地までかなりの時間を要した。

車をひたすら北に進ませている間、綾香の脳裏に依頼書を確認したときの記憶が蘇る。

これまでに何度も、「一風変わった男女」の撮影を行ってきたが、自分の服装を指定されたのは今回が初めてだ。

そもそも、行為が行われている最中は、撮影していることを意識したくないというクライアントが大半なのだ。

そのため、綾香も黒を貴重とした、目立たない、音を立てにくい服装で仕事をすることが多い。

それが、ストッキングにハイヒールという、撮影とは全く関係ない指定がされていたのだ。綾香自身、仕事をこなすこと

で、所謂「変態」への耐性はあるつもりだ。そんな自分が違和感を感じているのだ。

「今回の仕事…訳分かんない」

今日はどんな日になるのだろう…。

そんな思いと共に、綾香は不安と好奇心の入り混じった奇妙な感覚を感じながら、車の中で一人呟っていた。



## 【2】

目的地は、とても緑豊かな場所だった。

国道を左折してから、しばらく坂道を登っていき、ようやく敷地の入り口を見つけることができた。

乗用車がやっとすれ違うことができる程度の道幅だ。

その道を進んでいくと、やがて開けた土地が綾香の眼前に広がる。

敷地の奥にポツンと見える建物は、清潔感のある古さを放っていた。

新しさこそないものの、青いサーチライトで照らされ、上品にライトアップされている。

建物の反対側には、建築資材のようなものが山積みになれ、青いビニールが被されていた。

何かの工事に使われるのだろうか。こちらは、街灯のような味気ない光に照らされることによって、独特の不気味さを醸し出している。

敷地内の地面はデコボコした砂利だ。

ただ、建物の前に設置された駐車スペースだけは、コンクリートで塗装され、4台か5台の車が停められる程度の広さを確保している。

一番左側には、黒のレクサスが停まっていた。

今回のクライアントの車だろうか。

「ここに秘密のカフェでも作ったら意外と人気出そう」などと思いながら、綾香はレクサスの隣にバックで駐車を始める。

エンジンを切ると同時に、「ふう」というため息混じりの声が漏れた。

時間は22時50分。思いのほか、早く到着することができた。

綾香は車を降りてトランクからハイヒールを取り出した。

そして、運転用に使っているスニーカーからハイヒールへと履き替える。

建物へと続く道を歩き始めると、コツコツというハイヒールの小気味良い音が辺りに響き始めた。

そして、建物の敷居をまたぐと、そこから先は「完成された空間」が綾香を出迎える。

センサーが探知したのか、3歩ほど歩みを進めると、さらにいくつかのサーチライトが点灯した。幻想的な空間が目の前に広がる。

日本庭園を思わせる庭には、大小さまざまな石が敷き詰められており、池には元気な鯉を何匹か確認することができた。

「すごくお金かかってそう」と歩きながら呟く。

仕事柄、経済的に豊かな人々の生活を垣間見ることは少ない。

これまでに何度、自分たちが集めているコレクションについて自慢されただろう。

やれこれは〇〇製の貴重なもので…とか、アンティークが云々とか…。

綾香は驚いた表情でそれらの御託に聞き入っていたが、実際にはそう言った類のものに一切の興味はなかった。

ただ言えるのは、それほど経済的に余裕のある人間だけが、綾香のクライアントになり得たということであり、言い換えるなら、綾香にとって、その御託を聞くことは、仕事の一部になっていたということだ。

そんな綾香が「お金がかかってそう」だと感じたのだ。  
実際に、少くない金額が、その景色に投じられていることは確かだった。

しかし、他のクライアントとはどこか違う。  
ただお金のかかるもののかき集めたという訳ではなく、その景色には造った人間の意志が込められているように感じた。  
気のせいかもしれない。  
しかし、綾香は確かに、他の金持ちとは違う何かを目の前に広がる情景に感じていたのだ。



### 【3】

「お待ちしておりましたぁ。こんな遠い所まで、わざわざすみません」

綾香がその建物の呼び鈴を鳴らして出てきたのは、女性の自分でも惚れてしまいそうな美人だった。

加賀美玲奈、それが彼女の名前だ。

オフィス街を歩いていそうな、キャリアウーマンといった感じだ。フォーマルなスーツをさりげなく着こなしていて、短めのスカートからは、ほっそりとした脚が伸びている。

ただ細いだけではない、適度に鍛えられた筋肉を伴った健康的な脚だった。

身長は170センチほどだろうか。女性にしては背の高い方だ。その影響もあり、全体的なスタイルは、モデルを彷彿とさせるものになっていた。

彼女もまた、東京からやってきたのだろうか。

そう言えば、駐車場に停めてあったレクサスも品川ナンバーだった。

「初めまして。加賀美玲奈と申します。しのみや…あやかさん…ですよ。

真代さんからお話は伺ってます。

写真を見せて貰った事もあるんですけど…実物の方が美人さんですねえ。

ああ、土足で大丈夫です。そのまま中にどうぞ」

彼女はハイヒールをコツコツと響かせながら歩き始めた。その足元には、石畳の廊下が続いている。

「元々は小さな旅館で、それを改装したんです。お庭も含めてこの広さの建物を購入するとなると…場所を妥協するしかなくて」

彼女の言葉で合点がいった。個人宅と言うには、いささか豪華な造りなのだ。

廊下の脇には観葉植物や庭全体が見渡せる程大きな窓が悠然とそびえ立っていた。

それで…今日はわざわざ、こんな所まで来て頂いたという訳です。

本当にごめんなさいね。

ただ、実際に使ってみると、とても都合が良くて気に入っています。静かですし、なおかつ住宅街みたいに、近所に気を遣わなくていいのも魅力的ですねえ。」

庭の外を見る彼女の視線の先には静まり返った山々と…東京では控え目に見える月が…くっきりとした黄色い弧を描いている。

彼女が何を思い、何をしようとして、その発言をしたのか、綾香には想像できなかった。

「そう言えば…眞代さんはお元気ですか？」

ふと我に返ったように、彼女が質問する。

「最近は全然お会いする機会がなくて。まあお互い…仕事で色々と忙しいですからねえ。ふふ、綾香さんもこき使われているんじゃないですかあ？」



質問口調ではあったが、半ば社交辞令であることは明らかだった。

綾香は適当に相槌を打ちながら、彼女の後を追う。

不敵な笑みを笑いつつ、彼女は石畳の廊下を歩き終え、コンクリートで塗り固められた階段を下へと進んでいく。

「まあ、私達の活動はとても閉鎖的で特殊ですからねえ。それに対応できる人材も限られて来るって事です。綾香さんのように、何事にも柔軟に対応できる方は珍しいんですよ？本当に真代さんが羨ましいです。

まあ、真代さんの所で働いている綾香さんなら、面食らって撮影できない、なんて事もないだろうと思って。今日、このような形でお願いした次第です

もちろん、綾香さんにも…楽しんで頂きたいですし、ふふ」

気がつく、彼女は下りきった階段の先にある部屋のドアをあけ、綾香に向けて、部屋の中に入るよう手で促していた。

彼女が部屋の隅にあるつまみを回すと、無造作に吊るされていた電球の光が強さを増し、部屋の全貌が明るみになった。

※音声へと続きます